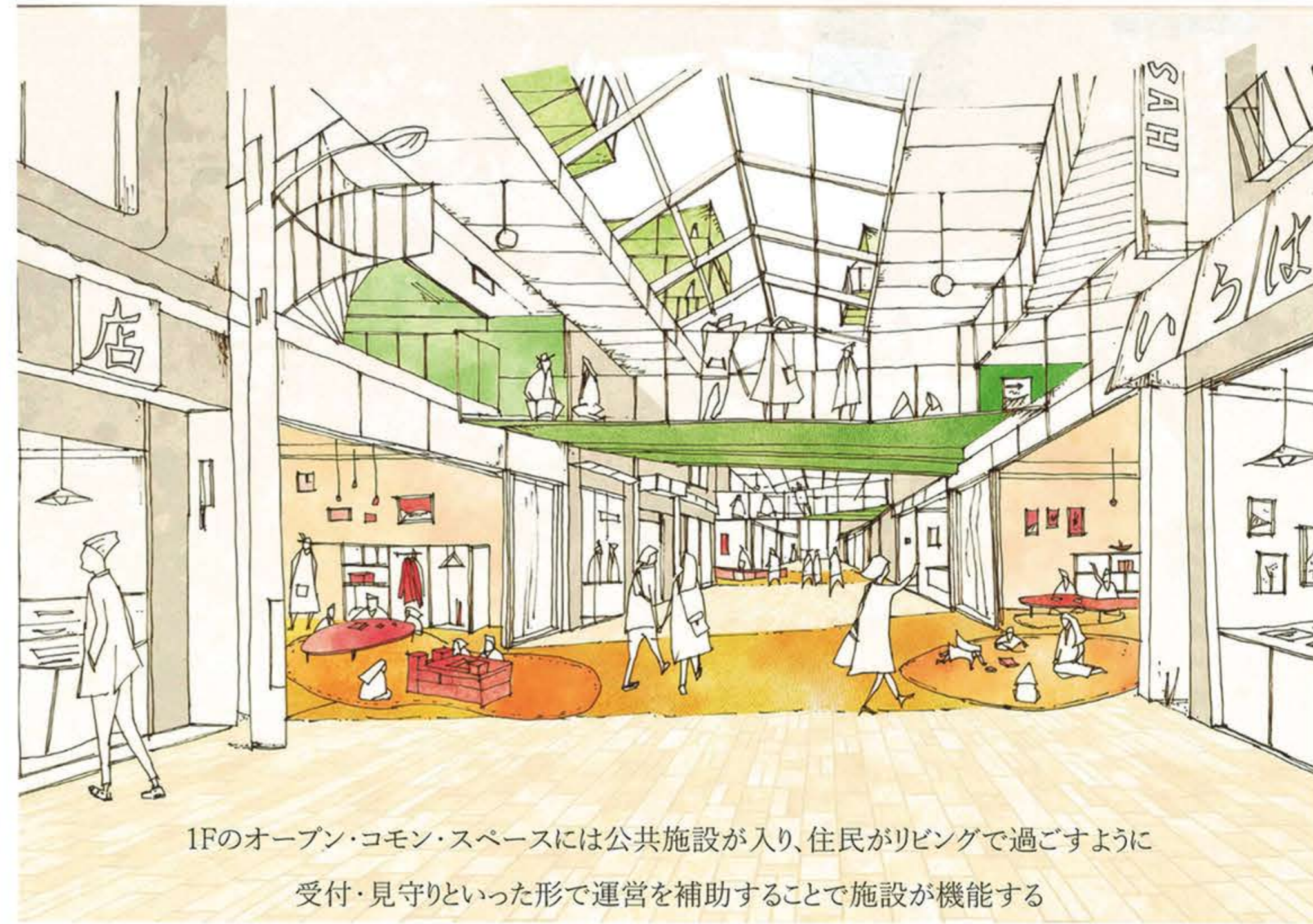


# まちのリビング

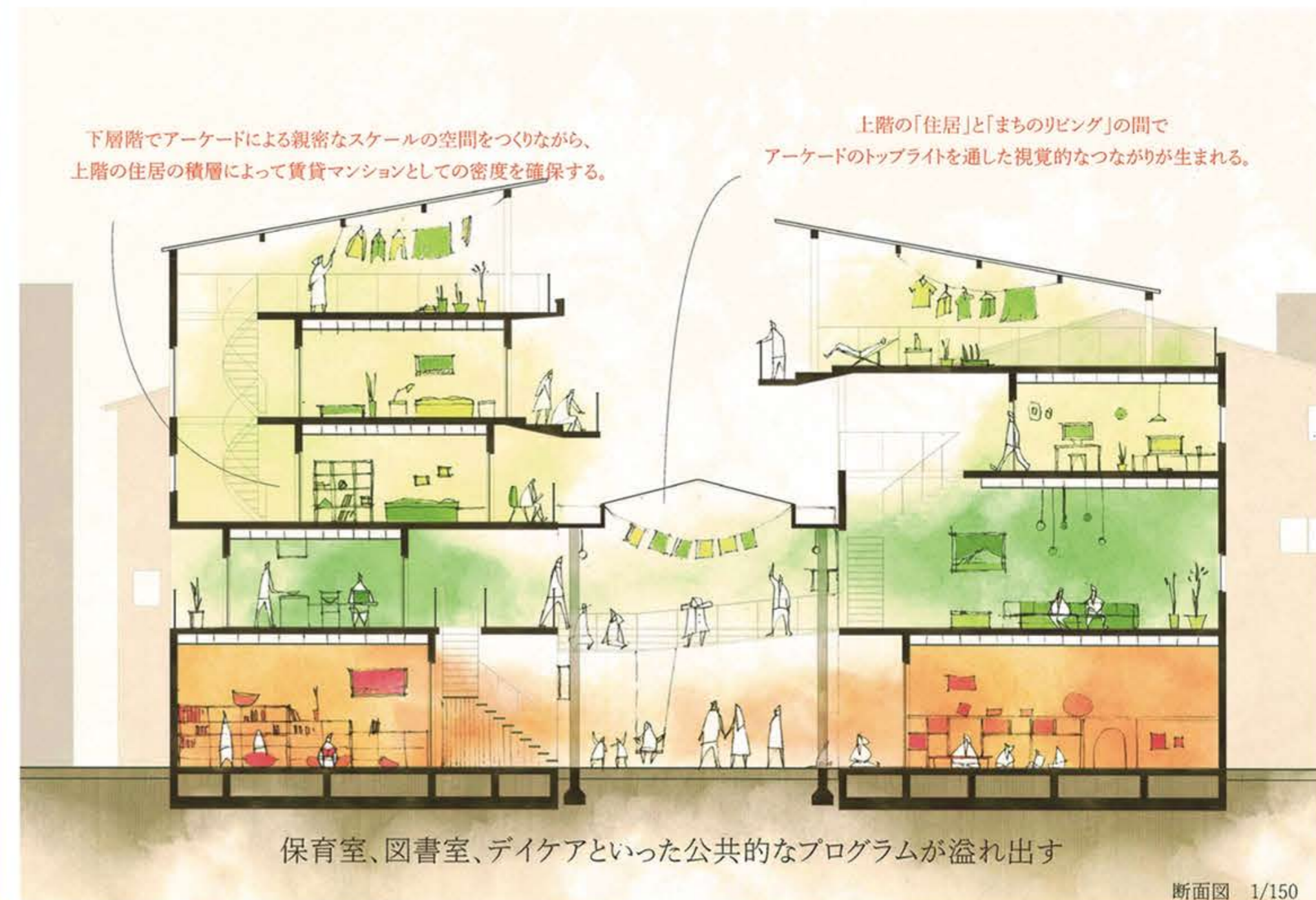
—小さな都市/大きな家に住むという快樂—



行政の公的機能がますます民間に移行されていく時代。  
 衰退する商店街上部に人が住むことで、アーケード空間を公共福祉機能を持ったオープンコモンスペースに転化していく計画。  
 子供好きの住民がそっと見守る保育所、読書が趣味の住民が本を読みながら受付をする図書館など  
 住民それぞれが気ままにまちに携わる快樂、そのサービスをコンパクトに享受する快樂を併せ持つ賃貸住宅とアーケードの複合の提案。



1Fのオープン・コモン・スペースには公共施設が入り、住民がリビングで過ごすように  
 受付・見守りといった形で運営を補助することで施設が機能する



下階階でアーケードによる親密なスケールの空間をつくりながら、  
 上階の住居の積層によって賃貸マンションとしての密度を確保する。

上階の「住居」と「まちのリビング」の間で  
 アーケードのトップライトを通した視覚的なつながりが生まれる。

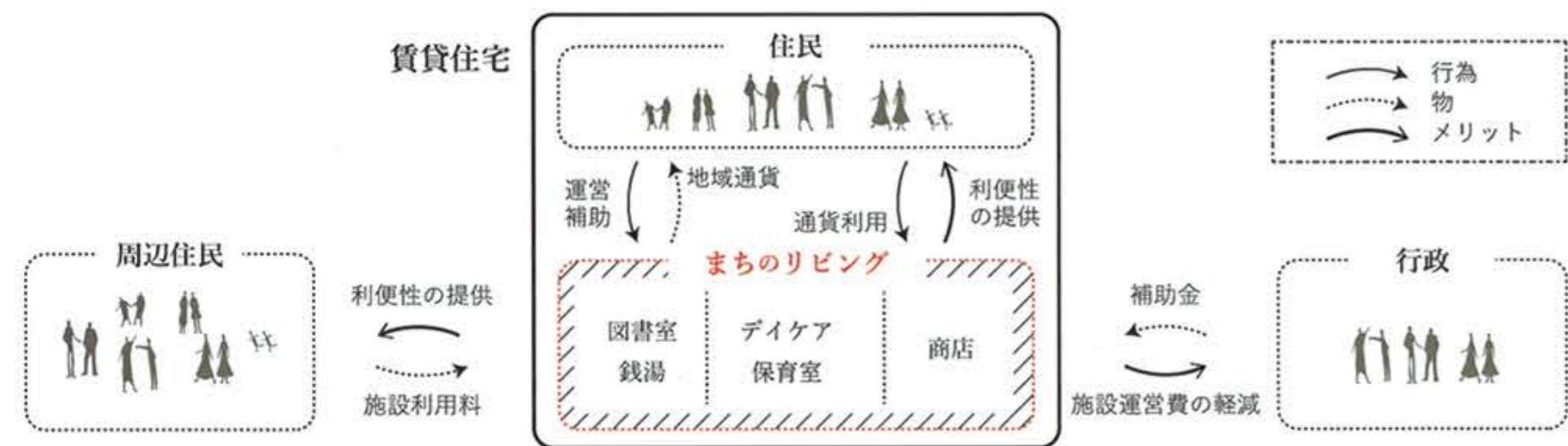
保育室、図書室、デイケアといった公共的なプログラムが溢れ出す

断面図 1/150

## 1 集合住宅内の公共プログラムを住民が交代で運営する

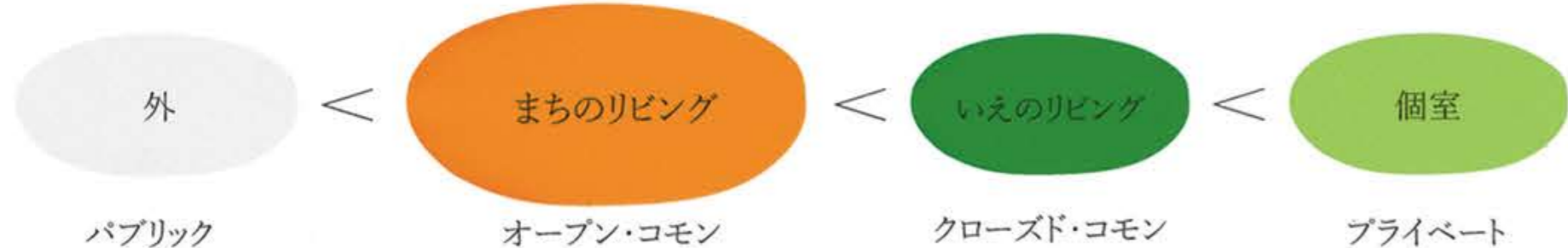
—まちのリビングが、住宅・地域・行政を繋ぐ—

まちのリビングは図書室や保育室、老人福祉、銭湯など、公共性の高いプログラムおよび、今まで行政が担っていた公的プログラムの一部を担う。  
 まちのリビングはあくまで住宅の一部であり、住民本位の暮らしやすいサービスを提供する。そこでは老若男女が行き交い、地域通貨が流通し、住民がまちのリビングを見守るだろう。



—まちに開かれたリビング—

賃貸住宅の構成を「パブリック/オープン・コモン/クローズド・コモン/プライベート」の4つに分けて考える。このうち誰でも出入りできる共用部であるオープン・コモンに保育室や図書室、老人福祉などを配置し、「私の中の公」として機能させる。  
 これが、「まちのリビング」であり、まちに必要な公共性の高いプログラムが入る。また、このオープン・コモンは賃貸住宅の棟と棟の間に配されることで、住民のための空間である家のリビングと区別される。



## 2 商店街をコモンスペースに転化

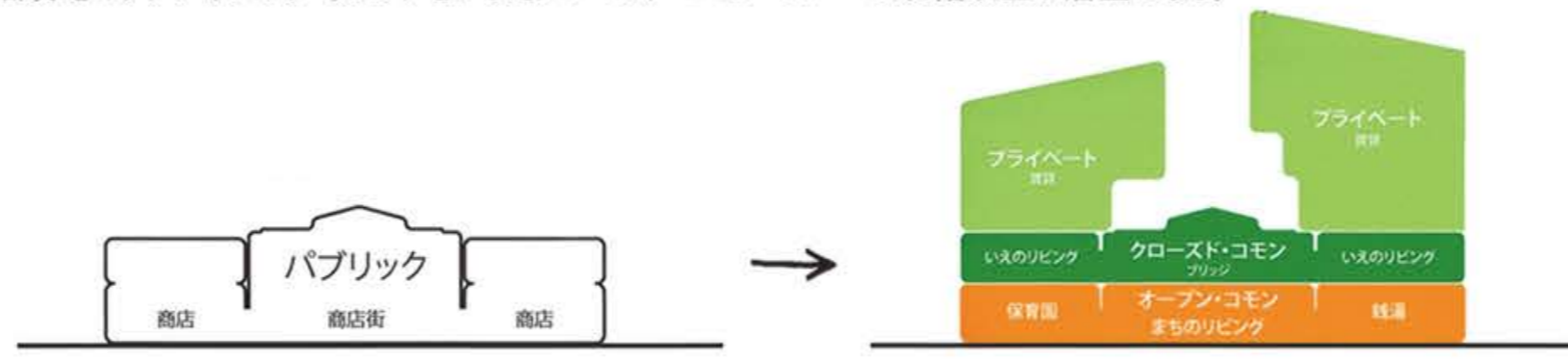
—廃れゆく商店街は解体され、まちのリビングとして生まれ変わる—

【台東区いろは会商店街】かつて繁盛を誇った商店街も、大型店舗やネットショッピングの普及により過去のタイロロジーとなりつつある。ここ台東区いろは会商店街も例外ではない。このシャッター街へと向かう商店群を1000人のための住宅街へと転換する。商店街という既存のインフラを器として、住民の趣向が溢れたコモンスペースが生まれる。

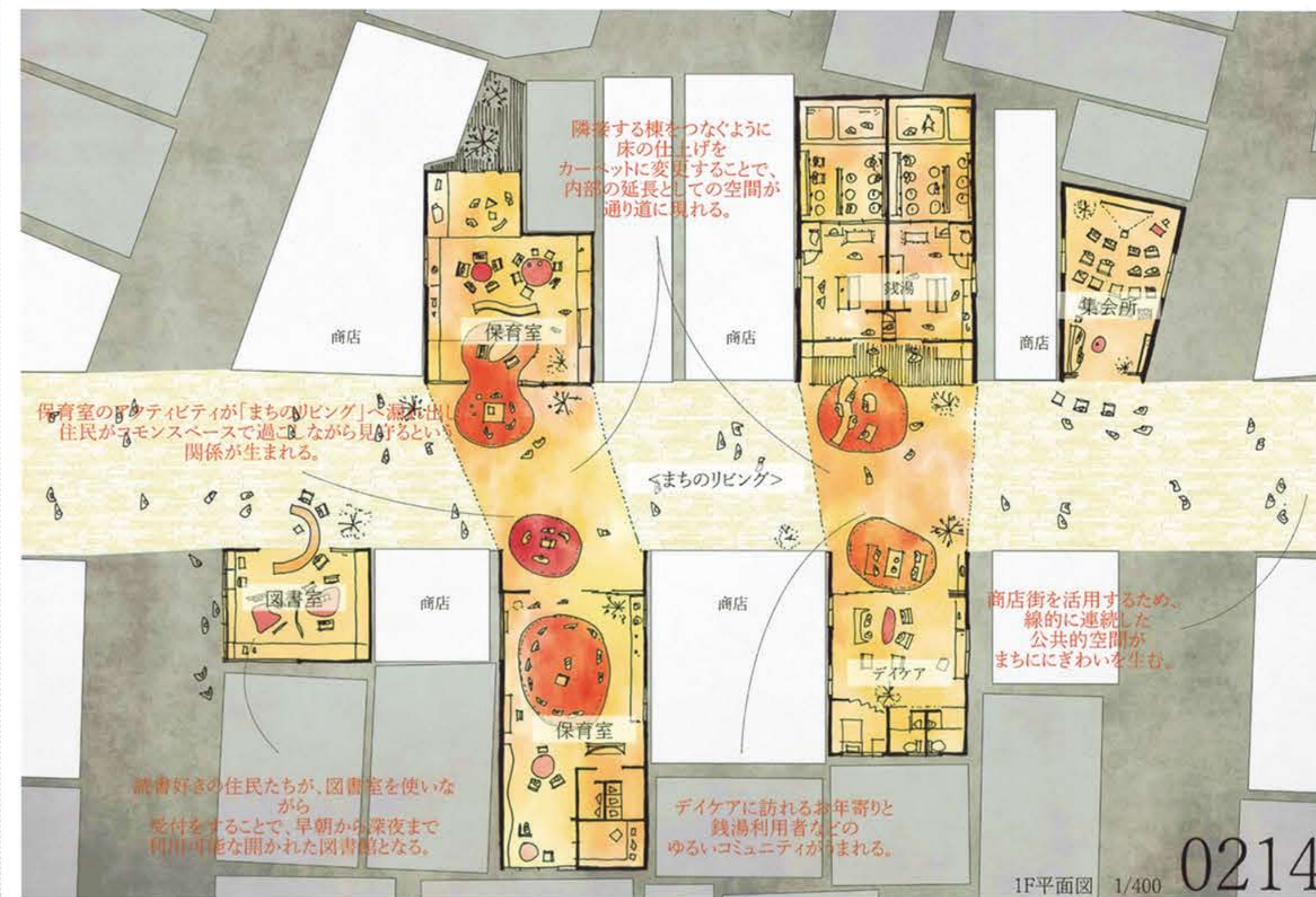


—アーケード空間の囲われた空間性が再稼働する—

アーケードというかつての「高い」通りは、公共性はそのままに、福祉機能が与えられ、まちのリビングに転換される。住宅によって囲まれたアーケード空間は、住人が所有意識をもったオープン・コモン・スペースとして生まれ変わる。新築される建物は、1階部分をオープン・コモン・スペースとしつつ、2階部分をキッチンやシェア・リビングといったクローズド・コモン・スペース、3階以上が居室になる。



## 3 まちのリビングが生み出す交流



隣接する棟をつなぐように床の仕上げをカーペットに変更することで、内部の延長としての空間が通り道に現れる。

保育室の受付が「まちのリビング」へ溢れ出し、住民がコモンスペースで過ごしながら見守るという関係が生まれる。

読書好きの住民たちが、図書室を使いながら受付をすることで、早朝から深夜まで利用可能な開かれた図書室となる。

デイケアを訪れるお年寄りや銭湯利用者のためのゆるいコミュニティが生まれる。

商店街を活用するため、線的に連続した公共的空間がまちにぎわいを生む。

1F平面図 1/400

0214